

## 2020年度 公募制推薦入学試験

社会学科A	小論文	受験番号	氏名
-------	-----	------	----

「なんで女子が後ろなの?」。昨年、福岡県立高校から都内の大学に進学した女性(19)は、高校の入学式でそう思った。

前列に男子、後列に女子が並ばされた。担任の女性教諭に理由を尋ねたが、教室も男子、女子と分かれた名簿順に座っており、「前からこうなっている」と返された。卒業式でもこの構図は変わらなかった。女性は「性別で分けるとしたら、背の高い男子が後ろに立つ方が理にかなっている。女子は男子の陰に隠れているということか、と思えた」と振り返る。

**A** 「隠れたカリキュラム」の事例だ、と女子栄養大の橋本紀子名誉教授(教育学)は指摘する。「例えば校長の男女比をみると、圧倒的に男性が多く、いびつだ。『上に立つのは男性』といったメッセージを子どもに伝える。学校が差別の再生産装置になっている側面もある」

橋本名誉教授によると、日本では1985年に発効した国連の女子差別撤廃条約を受け、80年代から「男女平等教育」が注目され始めた。90年代には隠れたカリキュラムへの関心が高まり、性別に関する固定的な見方から解放された教育が提唱されるように。だが、02年ごろから「伝統文化を破壊する」などとしてバッシングが始まる。橋本名誉教授は「日本のジェンダー平等教育は萎縮し、後退し、欧米よりずっと遅れてしまった」と言う。

ただ、遅れの中にも、男女平等をめざす取り組みは重ねられてきた。

神奈川県の小学校の男性教諭は毎年、ピンク色のシャツを着て教壇に立つ。「男なのに?」と笑う子どもたちに「なぜ男はピンクを着てはダメなの?」と問いかける。男性教諭は「子どもの中に刷り込まれた『常識』を揺さぶり、崩す。それが自分らしく生きることにつながる」。

県全体で取り組んできたところもある。

滋賀県は、性別による偏見や思い込みにとらわれず、進路選択や指導ができるようにと、20年前から小中高向けに独自の教材を作り、全校に配っている。

小学生向けの教材では、学校生活の中で起こりうる場面を想定し、かける言葉を考えたり、性別による決めつけがないかを振り返ったりするページがある。

「調理クラブのメンバーに、男の子は1人だけ。その子に向かって『女子の中に男子が1人だな』と言った友だちに、あなたはどんな声をかけますか——」

指導の手引には、「先生のためのジェンダーチェック」の一覧表もある。「男子に対しては女子に比べると少々厳しく指導した方がよいと思う」「生徒会や応援団長は男子がなるべきだと思う」といった意見への賛否を書き込みながら、思い込みや偏見がないか、先生が自分自身を見つめ直せる作りになっている。

福岡県では今年度、県教委が県立高校に男女混合名簿の導入を促した。新年度には、95校中80校近くが取り入れる。その一つの県立須恵高校の教頭は「混合名簿の導入で、男子が前、女子が後ろの式典風景も変わるだろう」と言う。「これまで違和感を感じる生徒もいたはずで、その気持ちにも思いを巡らせた」(山下知子、三島あずさ) (『朝日新聞』2019年3月2日 一部改変)

朝日新聞 デジタル 2019.2.28 朝日新聞社

承諾番号: 20-0439 朝日新聞社に無断で転載することを禁ずる

